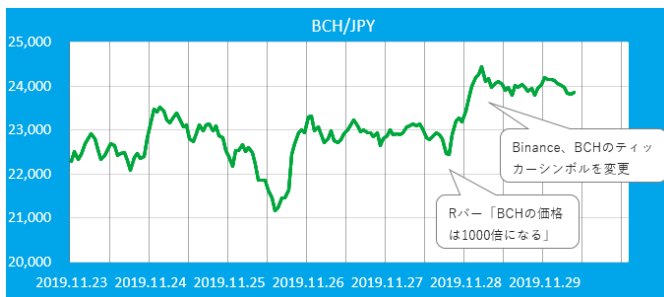
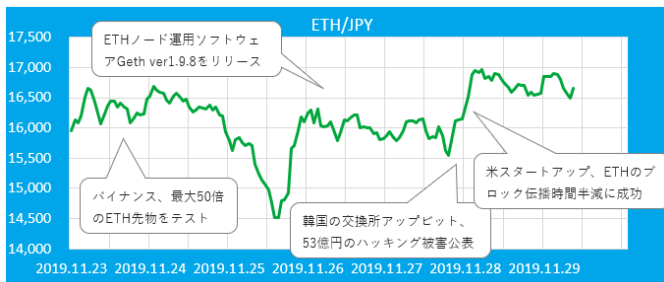
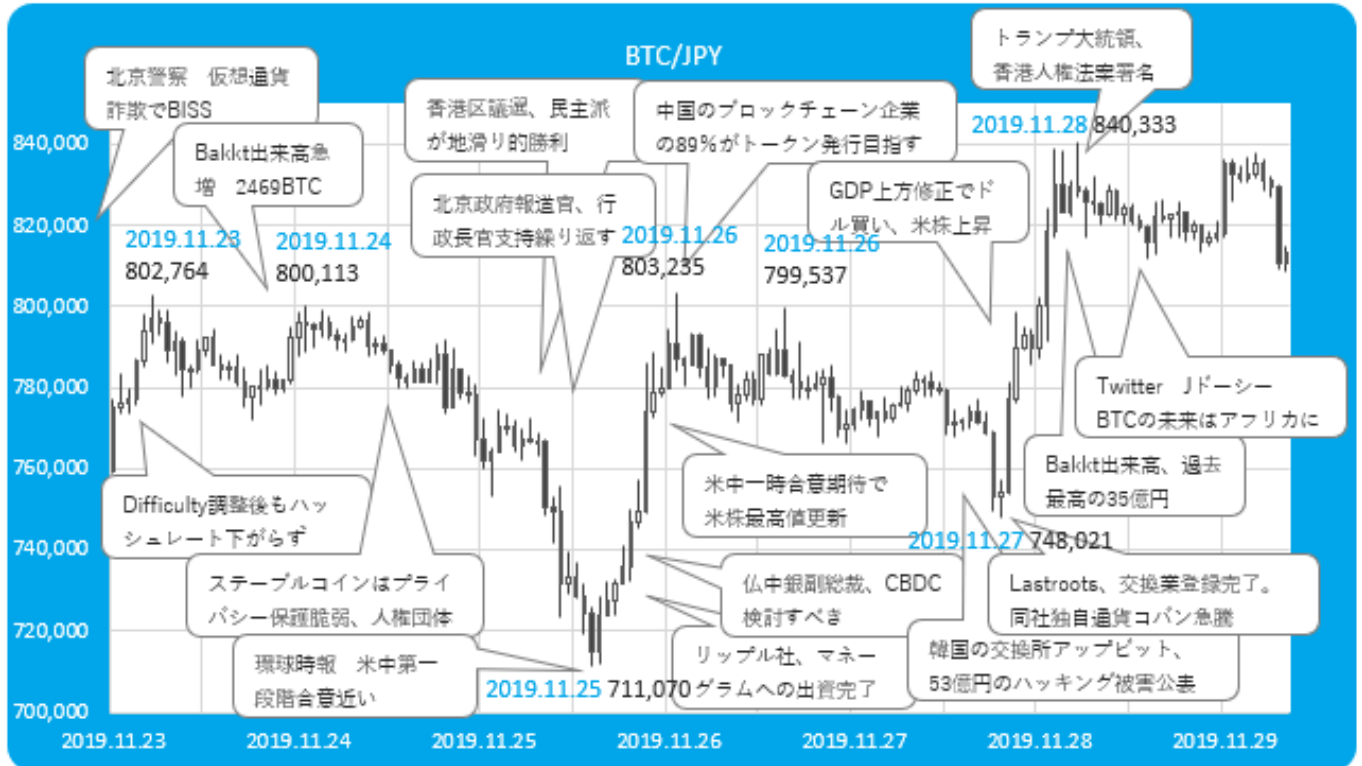


【ビットコインは底入れしたか、見極めのポイントは？】



Review

激しい値動き

今週のBTC相場は大きく下に行きつづけての推移。週初は深圳で39の交換所が違法と特定されたことや、中国人民銀行による仮想通貨の取り締まり強化の発表を受け、7000ドル（76万円）近辺まで下落、週明けになってもその流れは止まらず7000ドルを割り込むと6500ドル近辺、日本円で71万円台まで値を下げた。その後、米中第一段階合意は近いとの報を好感してか、米株が最高値を更新、BTCも一時80万円台を回復した。韓国の交換所アップビットが53億円相当のハッキング被害を発表後は再び下落、一時75万円を割り込んだが、顧客資産に被害は出ないことと、みなし業者だったLastrootsに登録があり同社独自のコイン、コバンが上昇するとBTCも切り返し、80万円近辺まで反発。更には米ドル・米株が上昇して、BTCも84万円台までつれ高となり、80万円超での推移が続いている。

Outlook

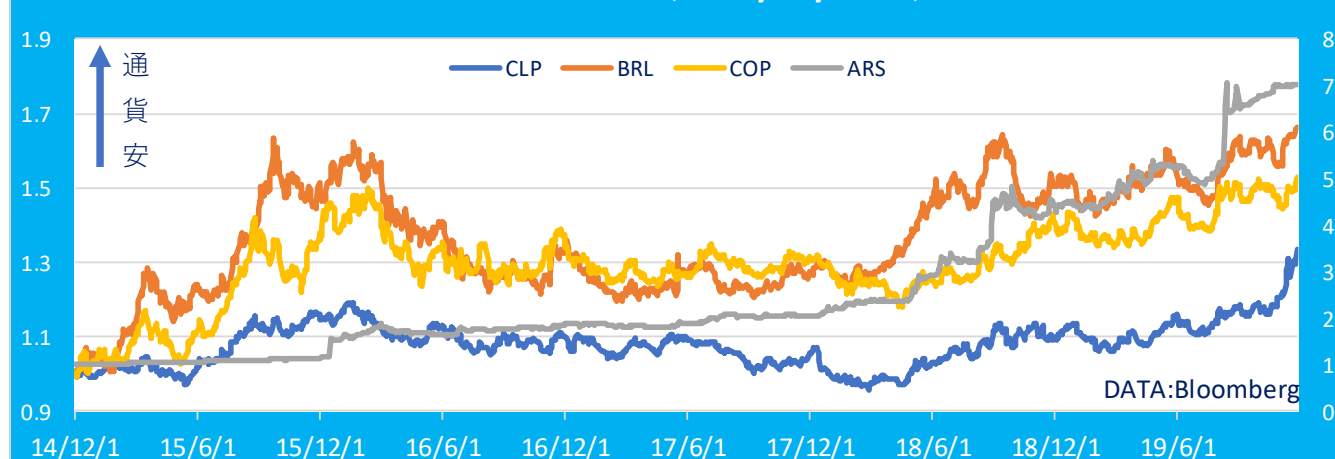
底は 71 万円だった

今週の BTC 相場は上値余地を探る展開を予想する。今回は「直近 1 か月の安値付近 80 万円を防衛線として底固めできるか」と申し上げたが、Binance ショックに続いて、中国での取締強化もあって 71 万円まで底割れ。しかし、そこから 2 度の 9 万円の切返しで、一旦の底入れを印象付けた。すなわち、予想通り「底値を固める展開」だったが、その底の水準を見誤った形だ。これは検証したわけではないのだが、テクニカル分析がよく用いられる仮想通貨市場だが、テクニカル的にここを抜けたら勝負ありというレンジをブレイクしたにもかかわらず相場が戻したり、常識的にはここら辺で止まるであろうという水準を平気でオーバーシュートしたりと、特に値幅に関してはテクニカル常識があまり通用しないという印象を持っている。テクニカル的にはまだ底を打ったとは判断しかねるのだが、底値から 10% 前後のダマシはよくあるが、それを超えて 15% 反発すると 25-30% 程度まで反発するという BTC 相場のクセから底入れをしたと考えている。

不思議な買い

底入れしたと考えるもう一つの理由が、今週の反発局面での材料だ。1 回目は環球時報で米中の第一段階合意が近いとの報道で、これがリスクオンとなり米株が最高値を更新したという流れだ。ただ、今年の 5 月ころから米中摩擦の激化が BTC の買いで、緊張緩和は売りだったはずだ。確かに、今年の 10 大ニュースで解説しているように中国本土からの逃避フローは究極的には習体制の盤石度合いによるもので、不安の少ない現状では米中摩擦が激化しても逃避買いは出にくいし、緊張緩和はリスクオンで買いになるという理屈も分からないではない。しかし、少なくとも従来は売り材料だったもので買われている。2 回目は韓国のアップビットのハッキングだ。Lastroots の登録がどこまで効いたのかは不明だがハッキングで売られたが、岩か何かにぶつかったかのようにそこから反発した。これは、テザーの裏付けが不足していたことが判明、世界最大とされ IEO で飛ぶ鳥を落とす勢いだった Binance がハッキングされたという致命的な売り材料をこなして上昇した 5 月の相場に似ているのではないかと考えている。この不思議な買いの背景に、いよいよ中国本土からの買いが混じり始めた可能性もある。

南米通貨推移 (2014/12/1 = 1)



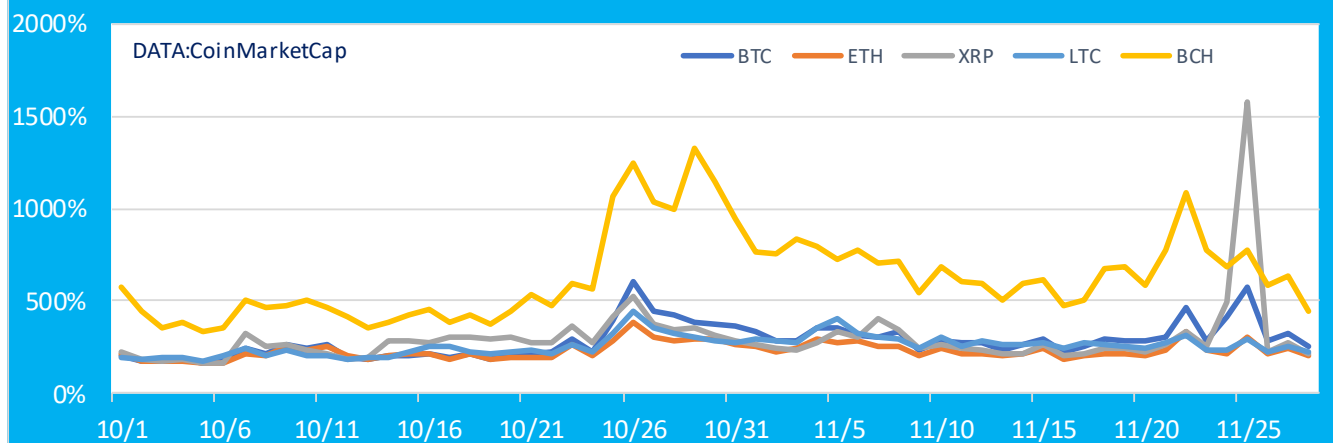
南米危機の兆し

もう一つの材料は南米危機だ。水曜日、ブラジル (BRL) チリ (CLP) コロンビア (COP) の通貨が軒並み史上最高値を更新した。一足先に危機的状況に陥ったアルゼンチンも安値付近に張り付いており、同国の危機が周辺に飛び火している状況なのかもしれない。キプロス危機の頃とは仮想通貨市場の規模も違い、例えばベネズエラの危機程度ではあまり影響を受けないが、これだけの規模で通貨危機が勃発すれば話は別だろう。特に投資家は年末越えでリスクアセットを持ちたがらず、年末にかけて状況が好転するとは考えにくい。同じようにクリスマス休暇前に年末越えの資金繰りを固めようと短期金利は上がりやすく、FRB が資金供給を拡大する可能性が高い。別稿で述べた様にベースマネーの拡大は BTC 価格にポジティブだ。更に来週は ISM・米雇用統計と重要な経済指標が続くが、メインシナリオが利上げ見送りなだけに悪い数字には反応しやすい。香港人権法案署名で米中関係にひびが入ったことも BTC にはプラスと考える。

予想レンジ：80 万～100 万円

Altcoin

主要5通貨出来高 (2019年1-3月平均 = 100%)



今週のアルトコインはBTCに連れ下りを行って来いの展開。ディップの前後でLTCはほぼ横ばい、ETH・BCHは上昇、XRPは下落している。ETHはハッキングとその後の買戻し期待、BCHはロジャー・バー氏の1,000倍発言など個別の材料が作用したものと思われるが、XRPに関して目立った売り材料は見当たらない。

そこで出来高を見てみると興味深い動きが観察される。上は今年の1-3月の出来高を1とした直近2か月の各通貨の出来高推移だ。内紛の影響で1-3月の出来高が極端に少なかったBCHが目立っているが、それ以外は当時の2-3倍程度で推移している。習発言のあった10/26の周辺ではやはり出来高が増えていることがわかる。これで見ると11/25にXRPの出来高が異様に増加している。その前の1か月間の平均の5倍以上だ。この背景は今のところ分からないし、その後の不振にも影響を与えている可能性もあるが、一方でこの下に行き来いで出来高が大きかったということはSWELL期待で積み上がったロングが相当はけているか、突っ込み売りをしたショートがたまっていることが伺える。潜在的なXRPの上昇要因となる可能性がある。

ETH: 今週のETHは下に行き来いの推移。前半はBTCについていく展開で14500円付近まで下落したが、その後16000円台まで回復。韓国の取引所でのハッキングを受け下落したが、顧客の資産に影響ないことを受け、下げ止まった。その後は、アメリカのスタートアップ企業がETHのブロック伝播時間半減に成功し、スケーラビリティの改善に繋がる可能性があるとの報もあってか、17000円付近まで上昇し、堅調な推移となっている。

XRP: 今週のXRPは下に行き来いの推移。週初のXRPのトランザクション量が過去最高の404万に達したとの報には特段の反応なく、BTC安に連れられ一時22円台まで下落した。リップル社のマネーグラムへの出資が完了したとの報や、イギリスの送金企業がODLを導入するといったポジティブ材料出たが、反応は限定的であった。週後半はリップル社のCEOが「ODLが目指すのは2兆ドル市場」との強気の発言もあってか、一時25円台まで上昇した。

BCH: 今週のBCHは堅調な推移。週初は堅調な推移となり、週半ばではBTCの下落によって連れ安となったが、すぐに元の水準(23000円付近)まで値を戻した。その後はもみ合いの展開続いたが、Bitcoin.comのロジャー・バー氏が「BCHは今から1000倍になる」との発言を受け24000円台まで上昇し、その後も底堅い推移が続いている。

LTC: 今週のLTCは横ばいの推移。LTC固有の目立ったニュースがない中、他通貨についていく展開となり、BTCが71万円まで値を下げた際にLTCは4500円台まで下げたが、その後5000円台まで回復。韓国の取引所のハッキングの報道を受け、一時5000円割れとなったが、すぐに値を戻している。

著作権表示©2019 FXcoin 株式会社

本レポートは一般的な情報提供を目的に作成されたものであり、特定のお客様のニーズ、財務状況又は投資対象に対応することを意図していません。レポート内のいかなる情報又は意見も、仮想通貨の売買、投資、保有などを勧誘又は推奨するものではありません。本レポートは信頼できるとされる情報に基づいて作成されておりますが、当社はその正確性、適時性、適切性又は完全性を表明又は保証するものではありません。本レポートは予告なしに内容が変更されることがあります。本レポートは著作物であり、著作権法により保護されております。当社の書面による許可なく複製又は第三者、個人顧客もしくは一般投資家へ配布することはできません。